2021年1月1日

説教「かしらを上げよ」

詩篇24篇1～10節

2021年の元旦礼拝です。御言葉を学んでいきましょう。

1．主の山に（1～3節）

①地に満ちているものは（1）**「地とそれに満ちているもの、世界とその中に住むものは主のものである。」**私たちの住むこの大地。そこには様々なものが満ちています。8849 メートルのエベレスト山。日本海溝は 8020 メートル。緑が豊かな山がある一方、砂漠地帯もある。太平洋などのような大海原がある一方、地には川や湖があります。そして、その地にはたくさんの生物が生息しているのです。微生物、植物、動物、そして人間。それらは、創造主によって造られたのです。すべて、主のご支配のなかにあるのです。

②主は地の基を据え（2）**「まことに主は、海に地の基を据え、また、もろもろの川の上に、それを築き上げられた。」**創世記1章を見ると、2 節には「地は茫漠として、何もなかった。やみが大水の上にあり、神の霊が水の上に動いていた。」とあり、9 節に至ると、神は仰せられます。「天の下の水が一所に集まれ。かわいた所に現れよ。」すると、そのようになったとあります。この詩篇にある「海に地の基を据え」とか「もろもろの川の上にそれを築かれた」というのは、創造主が茫漠としたところに、創造の御業を開始されている様があらわされていると言えましょう。

③主の山に登る者（3）**「だれが、主の山に登りえようか。だれが、その聖なる所に立ち得ようか。」**ここの山とはシオンの山のことです。エルサレムのことです。ダビデ王国の首都でした。その北には丘があって、シオンの山と呼ばれるようになったのです。また、聖なる山とも称されるようになったのです。ここでは、その山に登り、立たせていだけるのは誰なのかと問われます。

2．神を求め（4～6節）

①手がきよい者（4）**「手がきよく、心がきよらかな者、そのたましいをむなしいことに向けず、欺き誓わなかった人。」**すると、第一の答えは「手がきよく、心がきよらかな者」とあります。言葉と行いが一致しないということは、ありがちなことです。つい口先の信仰になってしまいがちです。キリストは「心のきよい者は幸いです。その人たちは神を見るから」(マタイ 5:8) と教えられました。第二の答えは「そのたましいをむなしいことにむけない」。神を知り、神と交わることと正反対の心の向け方です。第三には「欺き誓わなかった人」とありますが、主の前の不誠実な誓いでしょうか。これらのいずれも聖霊の取り扱いを受けねば実現しません。

②救いの神から（5）**「その人は主から祝福を受け、その救いの神から義を受ける。」**主の山に登り、聖なる所に立たせていただく人は、主から祝福を受けるのです。また「救いの神から義を受ける」のです。詩篇 36:10 には「注いでください。あなたの恵みを、あなたを知る者に。あなたの義を、心の直ぐな人に」とあります。聖なる山に登ることを許された人も恵みにすがるしかありません。

③主の御顔を慕い求める人々（6）**「これこそ、神を求める者の一族、あなたの御顔を慕い求める人々、ヤコブである。」**アブラハム、イサク、ヤコブの神、と創世記ではありますが、信仰によって歩むようにさせられた家族です。とはいえ、ヤコブなどは、兄を欺き、その生涯には信仰の試練も少なくありませんでした。でも、そのような経過において、霊的ご訓練をいただいたと言えるでしょう。主の御顔を慕い求める道へと導かれていったと言えます。

３．栄光の王に（7～10 節）

①かしらを上げよ（7～8）**「門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。栄光の王とは、だれか。強く、力ある主。戦いに力ある主。」**「義の門よ。私のために開け。私はそこから入り、主に感謝しよう」（詩篇 118:19）とありますが、ここでは門に人格的に呼びかけて、かしらを上げよとあるのです。なぜならそこから、栄光の王が入ってこられるからだというのです。栄光の王とは、「力ある主、戦いに力ある主」とありますが、ダビデを再三にわたって勝利に導いてくださった主です。

②栄光の王が入ってこられる（9）**「門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。」**7 節と全く同じです。門に向かって、」「お前たちのかしらをあげよ」と二度も言われているのは、それが、その門の入口が低すぎるからでしょう。栄光の王をお迎えするためにも、かしらを上げなければならないのです。「永遠の戸よ」というのは、「古い門」という意味です。なかなか、一定以上に開かない戸に、もっと高くまで開けよと呼びかけられるのです。

③万軍の主（10）**「その栄光の王とはだれか。万軍の主。これぞ、栄光の王。」**なにしろ、栄光の王が入ってこられるのですから。栄光の王とは、天地をすべ治めたもう主です。大空からこの大地にわたって、起こり来る様々な問題などのすべてに先立って、進んでくださる主ご自身です。これが新約聖書的にいえば、イエス・キリスト御自身であることはいうまでもありません。

《結論》

新しい年の元旦礼拝。コロナ感染問題に明け暮れた昨年。今朝は、この年の歩みの御言葉の指針を得たいのです。2021 年の御言葉については、主日に学びますので、今朝は詩篇 24 篇から学びます。

今朝の聖書箇所には、主の山に登り、聖なる所に立ちうるのは、どのような者達なのかと問われています。その時に、心がきよく、その魂が的確に主に向けられているということが示されました。そして、その人には祝福と、救いの神から義を受けるとありました。このことは新約聖書的には、自分の努力ではないと教えられています。「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるのではありません。だれも誇ることのないためです。」（エペソ 2:8-9）

主の救いをいただくのはただ主の恵みによるのです。行いによるのではなく、信仰だけなのです。しかし、よく読むとこの詩篇にも、5 節に「その人は主から祝福を受け、その救いの神から義を受ける」とあり、6 節には主の「御顔を慕い求める」とあります。自分で自分の身をきよくするのではないことは、この詩の作者（ダビデ）もよく知っていたのです。それでは、何がここにおいて示されているのかというと、7 節と 9 節に繰り返して説かれて点です。「門よ。おまえたちのかしらを上げよ。永遠の戸よ。上がれ。栄光の王が入って来られる。」という勧めの言葉です。つまり、いかに「信仰によって」という言葉を使っていたとしても、それが実際的に駆動していなければ、信仰によってという言葉ですら、お題目になってしまうということなのです。

ここでは、「門よ」と呼びかけられていますが、私には自分に向かって語られているように思われます。信仰の年数を何年経たとしても、あるいは御言葉を語るという立場を与えられているとしても、その門を低くして、栄光の王が入れないようにしてしまってはいないかと語られているように思われます。「永遠の戸」というのを「古い戸」と読むならば、さび付いたりしていて、面倒くさがって、開けるようとしていない自分、自らの心の扉のことを言われているのではと気づかされました。

「かしらをあげよ」とありますが、頑なに自らの戸を上げようとしない自らに、問いかけをなさる主に応じたいのです。あなたはいかがですか。「見よ。わたしは戸の外に立ってたたく。だれでも、わたしの声を聞いて戸を開けるなら、わたしは彼のところに入って、彼をともに食事をし、彼もわたしとともに食事をする」（黙示録 3:20）

ともに、自らのかしらを上げ、戸をあけて、万軍の主、栄光の王に入って来ていただき、今年の霊的な戦いの歩みに先立っていただ

こうではありませんか。